

平成 30 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16713

研究課題名(和文) オーストリア文学における非-体験の災厄の語り E・イエリネクを例に

研究課題名(英文) How catastrophic events are narrated by someone who is not personally involved: narrative strategies in contemporary Austrian literature.

研究代表者

福岡 麻子 (Fukuoka, Asako)

神戸大学・大学教育推進機構・准教授

研究者番号：40566999

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、作家エルフリーデ・イエリネク(1946年生)をモデルケースとして、オーストリア文学における第二次世界大戦体験者の後継(子・孫)世代が、自ら体験しえなかった災厄について語る方法を、「非-体験の災厄の語り」と位置づけ、その語りの一つのモデルを提示する試みである。在欧のイエリネクが東日本大震災への応答として執筆した演劇『光のない』(2011)をはじめ複数テキストを扱い、時間的・地理的に隔てられた災厄、即ち、メディアを介して(のみ)なしえた災厄の経験に取り組む文学的方途の諸相について、その一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：One of the most difficult and thoroughly discussed issues in contemporary society is the question of who is "tojisha" (directly affected) by a catastrophic event, for example, in post-WWII society or following the 2011 Tohoku earthquake and Tsunami. In this project I delved into some noteworthy examples from contemporary Austrian literature that deal with this issue, illustrating their narrative strategies and deriving one model from them. The play "Kein Licht" ("No light", 2011) by Austrian author Elfriede Jelinek (born 1946) served as the central example. This play was written in immediate response to the Tohoku disaster, but told from a geographical distance (i.e. based on her "experiences" via various media). In light of that Jelinek's literary strategies that deal with not only the event itself but also the "medial" characteristic of experiences were analyzed in this project.

研究分野：ドイツ語圏文学

キーワード：オーストリア現代文学 カタストロフィ論 イエリネク

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦終結から70年が過ぎ、同時代文学の担い手の中心は、戦争とホロコーストの体験者から、彼らの子・孫の世代に移りつつある。C. カドゥフとU. フェダーらが「戦後文学の終わり?」(Caduff / Vedder 2005: 9)と掲げるように、戦争との関わり方が大きく異なる複数の世代を前にして、「戦後」文学というくりはもはや必ずしも有効ではない。「『自身では経験していない』[ohne eigene Erfahrungen]若い世代の文学がナチズムとホロコーストに取り組む際の固有な諸条件」(同上)を明らかにすること、またそれらの条件に方向づけられる語りの新たな枠組みや方法を探ることは、現代のドイツ語圏文学・文化研究における中心的な課題のひとつとなっている。

本研究が主な考察対象としたオーストリアの作家エルフリーデ・イエリネク(1946年生)も、第二次大戦経験者の子世代にあたる。彼女の作品は、1968年の学生運動(Janke 2002)、70年代に興隆した第二波フェミニズム(Janz 1995)との関連をはじめ、主に社会批判の文学という観点から考察されてきた。特に着目されるのが、1990年代以降のオーストリアで高まった外国人嫌悪をはじめ、決して過ぎ去ってはいない「過去」としての社会問題とのイエリネクの取り組みである。加害者としての立場を明確に提示したドイツと異なり、「ナチズムの最初の被害者」としての国家像をまずは打ち立てたオーストリア(いわゆる「犠牲者神話」という文脈に照らし、イエリネクにおける重要な課題の一つとされている。

イエリネクのこうした「過去」との取り組みについては、すでに多くの議論・考察がなされているが、彼女が後継世代の一員であることにはまだ十分に目が向けられているとは言い難い状況であった。だが、戦争との関わり方が大きく異なる複数の世代を一口に「戦後文学」でまとめることがもはやできなくなれば、体験者による戦争の想起と非体験者による「想起」の間には、美学的・方法的に違いがあるのか、あるとすればどのようなものかということが問題になる。そこで本研究では、イエリネクの取り組みを「後継世代」「非-体験世代」のそれとして改めて位置付けることにした。

2. 研究の目的

前述の背景に照らし、本研究ではまず、以下の2点を主な目的として設定した。

- (1) 作家エルフリーデ・イエリネク(1946年生)をモデルケースとして、オーストリア文学における第二次世界大戦体験者の後継(子・孫)世代が、自ら体験しえなかった災厄について語る方法を、「非-体験の災厄の語り」と位置づけ、考察すること

- (2) その結果に基づき、非-体験の語りの一つのモデルを示すこと

ドイツ語圏文学において、「戦後文学」という括りは戦争体験者の減少に伴い見直しが求められている。本研究では、オーストリア「後継世代」の試みの例を、メディア論的観点を軸に収集・分析し(上記1)、体系的に整理して提示することで(上記2)、この要請に応える考察を提供することを目指すことにした。

ただし、研究を開始してから直面した問題性に照らし、目的(1)に以下の観点を加えることにした。

イエリネクは、とりわけオーストリアにおけるアクチュアルな社会事象に、都度テキストを通して応答することを特徴の一つとしている。出身のみならず、そうしたスタイルに照らしても「オーストリアの」作家という位置付けにあるイエリネクだが、近年ではオーストリア外、あるいはヨーロッパ外の時事に応答することも増えている。イラク戦争を扱った演劇『バンピラント』*Bambiland*(2004年初演)『バベル』*Babel*(2005年初演)、そして東日本大震災と原発事故への応答として書かれた演劇『光のない。』*Kein Licht*(2011年初演)など、その例は枚挙にいとまがない。

これら一連の作品が示すように、「自身では経験していない」災厄についてどのように語りうるか、という問いの射程は、過去の記憶の保持・継承といった観点だけでなく、同時代の、場合によってはほぼリアルタイムで「経験」しうる災厄にも及ぶ。メディア技術の発達した今日、戦争やテロ、自然災害など、地理的には隔たった地の出来事であっても、情報を得たりリアクションを発信したりすることはますます容易になっており、その際の言葉の多くは「自身では経験していない」立場からのものとなる。

無前提に「当事者」を自認することには慎重でなければならないものの、多大な数の人に犠牲を強い、社会的枠組み全体の根本的な変更を余儀なくさせる(はずの)事態に遭っては、どこが「現場」で何が「直接の」体験であるかを同定することは難しい。あるいは、それらを同定する作業そのものが、大きな政治性や権力性を孕んでいることは見過ごせず、ドミナントな区別(の言説)を文学が問いに付しているともいえる。

こうした問題性は、今日の社会にとって本質的な次元にあるといえ、また、イエリネクの近年の創作動向に照らしても、目配りが不可欠であると思われた。また、東日本大震災への(日本国外からの)応答については、イエリネク研究の範囲に限ってみても、国際的な関心が寄せられており、この要請に応えるという意味でも、本研究の課題の一つとすることが必要であると考えられた。

3. 研究の方法

時間的・地理的に隔てられた「非-体験の災厄の語り」の諸相を明らかにし、その語りのモデルを析出することを目指し、本作業では以下の手順で作業を進めた。

(1) 理論的基盤の構築

思想分野におけるカストロフィ論(ナンシー、アンダース等)、最新のドイツ語圏現代文学論(Caduff/Vedder等)、また「震災(後)文学」論(木村、小森等)といった領域の諸文献を参照し、本研究の理論的基盤を整えた。

(2) 作品分析

対象とする作品のテキスト分析を行い、先行研究に照らしつつ考察を行った。考察の過程では、研究代表者の所属する研究会における議論、研究協力者との定期的な意見交換により、ドイツ語圏現代文学研究を牽引する研究者らからフィードバックを得ることができた。それにより、考察の精緻化を図った。必要な文献・資料に関しては、日本では入手・閲覧困難なものも、ウィーン大学イエリネク研究所の協力を得て収集することができた。

(3) 考察の理論化と成果発表

成果発表については次項で詳述する。

4. 研究成果

3年間のプロジェクトを通して、現代オーストリア文学の中から、「非-体験」の災厄について語るテキストを収集し、イエリネクを中心にその分析を行うことができた。その上で、彼女がデビュー以来駆使する文学的方法を、「非-体験の災厄の語り」の方法として位置付け直し、語りの一モデルとして示すことができた。

以下、年度ごとの成果について概観する。

研究実施計画に基づいて平成27年度は、イエリネクも依拠するオーストリア戦後文学の詩的方法論に照らし、テキストの視覚的・聴覚的作用が持ちうる意義に着目した考察に着手した。近年のドイツ語圏におけるメディア論を牽引するS. クレーマーの諸論考を手掛かりとした。メディア論の蓄積、またそこに示される「媒介(する)」というコンセプトの多面性は、当初の視覚的・聴覚的作用という観点を超え、(非-)体験を(文学として)語るという営みの考察において、多大な示唆となった。

これを踏まえ、クレーマーの主著の一つ”Medium, Bote, Uebertragung“(2008)における「翻訳」概念に依拠し、オーストリアのナチズムの過去、そして東日本大震災を題材とするイエリネク諸作品の考察を行った。イエリネクは単に「社会批判的」と位置づけられることも多いが、本研究では一歩踏み込んで、非-体験の災厄、つまり、何らかの表象という既に媒介された形を通じて(のみ)体験した災厄についての語りとして、イエリ

ネクの文学的手法、とりわけ引用という手法を、従来とは異なる観点から示すことができた。

この成果は、まずドイツ語論文としてまとめ、国際的なイエリネク研究の拠点となっているウィーン大学(オーストリア)イエリネク研究所のインターネットプラットフォームに掲載された。またこれに基づき、同研究所が主催した国際学会(平成28年2月)にて発表を行い、他参加者らと議論を行った。その後、同研究所および研究協力者をウィーン大学にて訪問し、研究面談を行った(同年同月)。これらにより、演劇と文学というジャンル(フォーマット)の相違と関連、より包括的な「カストロフィ」のディスクールに関する考察といった、研究を方向づける新たな課題、および関連資料を見つけることができた。

また、KYOTO EXPERIMENT 2016 京都国際舞台芸術祭 地点『スポーツ劇』イベントレクチャーに講師として招聘され(2016年2月24日)、研究者のみならず、より広く立場を越えて多くの方々と話題を共有し、意見交換できたことで、本研究にとってもまたとない貴重な示唆を得ることができた。地点の演出家三浦基氏には、上演・演出の観点からの示唆・意見をいただき、本研究にとって極めて重要な補助線を得ることができた。

平成28年度は、記憶・作品を形成するメデイウムという観点から研究を進めた。当初の計画では、書字による文学作品と他の形態の芸術との比較を行うことを予定していたが、前年度の成果、および研究協力者らからのフィードバックを踏まえ、演劇に的を絞って書字テキストとの関係・連関を考察した。

前年度の成果から明らかになった当該年度の課題として、歴史的視点と比較文化的視点の導入があった。これらについては、オーストリア外の震災後文学論を参照しつつ考察を行った。日本学分野の国際学会における研究発表の際にも、比較文化的観点からの重要な示唆を多く得ることができた。

当該年度の成果は次の3点としてまとめられる。

(1) 本研究で便宜的に「非-体験」と称している立場を、両義性という観点から改めて位置づけ、作家イエリネクの文学的方法の特色と意義を示すことができた。これは、「非-体験」という表記・観点の孕む問題ないし粗雑さをも明らかにし、本研究が目指す語りモデルの理論化の足場作りには不可欠な作業ともなった。

(2) 東日本大震災に対するイエリネクの応答は、単に「外」からの反応ではなく、「当事者」は誰かという問題に改めて光をあてるものであることを示した。またこの点における日本の書き手との共通性や相違について、国内外の研究者と議論を行い、考察を深めることができた。

(3) 第二次世界大戦および当時のナチズム

を主題とするイエリネクのテキストにもあたり、上記(1)(2)で述べた事柄が、時間的に隔たりのある災厄との取り組みとも連関していることを明らかにできた。

平成29年度(プロジェクト最終年度)は、研究計画に従い、(1)「非-体験の災厄の語り」モデルの一つの可能性を提示することを最終目標とし、(2)そのためにここまでの考察を発展的にまとめた。オーストリア作家としてのイエリネクにとって地理的に隔てられた「東日本大震災」とどのように取り組んでいるかを中心的な例とした。

本研究では便宜的に「非-体験」と記しているが、前年度の成果でも明らかになったように、多くの文学作品において、地理的・時間的に隔てられた災厄は、「体験していない」という事態そのものだけでなく、「伝聞」のモードに依拠して描かれることも多い。本研究では、何らかのメディアを介して出来事にアクセスしたという媒介性そのものにこそ、現代文学の本質的な問題性が表れていると考えた。そこで「体験した/していない」の二分法から離れ、両義性という観点から、作家イエリネクの「引用」の方法について考察した。引用は、イエリネクがデビュー以来多用し、東日本大震災、そして原発事故への(ヨーロッパからの)応答として発表した『光のない』においても駆使している方法である。本研究では、この引用という方法が、それがもたらすテキストの多層性ゆえ、「非-体験の災厄の語り」として示唆的な構造を持ち、一つのモデルとなりうることを示した。その際、戦後生まれのイエリネクが、オーストリアのホロコーストという過去とどのように取り組んでいるかについても検討し、考察の示唆を得た。

成果は二つの国際学会での発表(査読付きパネル一件、招待講演一件)の形で広く問うことができた。また、パネルで共同発表を行った研究者ら(ウィーン大学他)とは、共著書の出版を計画・準備を進めている。彼らとは2016年開催の国際学会(ウィーン大学)以来、共同発表、出版計画と歩を進めており、持続的な共同研究体制を開拓できたことも成果の一つである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

福岡麻子: 非-体験の災厄を語る方途 - E・イエリネク『光のない』について、日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第33号、2017、pp.11-19. 査読あり

福岡麻子: E. イエリネク『光のない』における言語的特色 —— 死者の語りの観点から、日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第47号、2015、pp.27-38. 査読あり

Asako Fukuoka: Erzählen der unerlebten Katastrophen Übersetzen als literarisches Modell bei Elfriede Jelinek und Autoren der „zweiten Generation“. Forschungsplattform Elfriede Jelinek. (ウィーン大学イエリネク研究所のウェブプラットフォーム)

http://fpjelinek.univie.ac.at/fileadmin/user_upload/proj_ejz/PDF-Downloads/Beitrag_Asako_Fukuoka.pdf 2016年1月公開

〔学会発表〕(計6件)

Asako Fukuoka: Von selbst nicht erlebten Katastrophen erzählen. Zu Jelineks Kein Licht. Das 23. Internationale Sorak-Symposium (韓国独文学会主催国際ソラクシンポジウム) 慶州コロナホテル、2017.09.15.-17. 韓国独文学会による招待、および、日本独文学会による派遣

Asako Fukuoka: From a distance: ways of listening to the dead in Elfriede Jelinek's "Kein Licht". (パネル "Can the dead speak?": the politics of 'voice' in Japan's nuclear literature. における発表。発表言語は日本語) EAJS 2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies. Faculdade de Ciências Sociais e Humanas - NOVA FCSH, CHAM - Centre for the Humanities in Lisbon, 2017.09.02. 査読あり

福岡麻子: 身体を経済化させるものとしての言説 - E. イエリネク『動物について』(シンポジウム「かけがえがないとはどういうことか? - 近現代ドイツ語圏文学における交換(不)可能性の主題」) 日本独文学会秋季研究発表会、関西大学、2016.10.22. 査読あり

Asako Fukuoka: Der Raum, in dem Totenstimmen hallen - Elfriede Jelinek und Toshiki Okada. Workshop „WEST-ÖSTLICHE RAUMFIGURATIONEN“ (学習院大学主催国際ワークショップ「西洋-東洋の空間フィギュレーション」) 学習院大学 2016.10.15.

Asako Fukuoka: Auseinandersetzung mit medialer Erfahrung von Katastrophen. Zu Elfriede Jelineks „Kein Licht“. Die Verarbeitung von Katastrophen und Traumata in Literatur und fiktionalen Medienproduktionen. (ウィーン大学主催国際シンポジウム「文学・フィクションにおけるカタストロフィとトラウマとの取り組み」) ウィーン大学、2016.9.26. ウィーン大学による招待発表

Asako Fukuoka: Erzählen der unerlebten Katastrophen Übersetzen als literarisches Modell bei Elfriede Jelinek und Autoren der „zweiten Generation“. INTERDISZIPLINÄRER WORK

SHOP FÜR NACHWUCHSWISSENSCHAFT
LERINNEN Elfriede Jelinek und die europäis
chen Literaturen. (ウィーン大学イエリネク
研究所主催国際ワークショップ「イエリネク
とヨーロッパ文学」)、ヴイドゴシチ大学、20
16.2.4.-5. 査読あり

〔図書〕(計1件)

由比俊行、藤原美沙、宇和川雄、福岡麻子、
熊谷哲哉 『かけがえがない とはどういう
ことか? 近現代ドイツ語圏文学におけ
る交換(不)可能性の主題』日本独文学会研
究叢書 128号(日本独文学会)全66ページ、
本人担当部分 39-51 ページ。電子書籍：
<http://www.jgg.jp/pdf/updata/SrJGG-128.pdf>

〔その他〕

福岡麻子：「イエリネクの言語について」地
点『汝、気にすることなかれ』上演プログラ
ム所収のコラム(2017)

福岡麻子：KYOTO EXPERIMENT 2016 京都
国際舞台芸術祭 地点『スポーツ劇』プレイ
ベントレクチャー、ロームシアター京都、
2016.02.24.

6. 研究組織

(1)研究代表者

福岡麻子 (FUKUOKA, Asako)

神戸大学大学教育推進機構国際コミュニ
ケーションセンター准教授

研究者番号：40566669

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし

(4)研究協力者

Christine Ivanovic

ウィーン大学文学部教授